

# 礼拝

令和7年1月27日  
5号



## 明るく正しい親切な人になろう ～校訓 三宝に帰依しよう～

いよいよ三学期も残すところ二ヶ月となり、学年末に向けた締めくくりとともに、一年間の振り返りを行う時期となりました。

さて一月二十四日は、今日の京都文教学園の基礎を築かれた第三代校長大島徹水先生の大恩に感謝する法要を営み、全教職員・生徒の皆さんで建学の精神をあらためて確認し校訓に沿って生活することを誓い合う日であります。本校設立の思いや、現在に至る緒先徳の大恩については裏面を読んでください。

大島徹水先生が掲げられた校訓の一つに「敬上慈下(きょうじょうじげ)」というお言葉がありまし

た。これは、法然上人が、瞋煩惱(しんぼんのう)に對してどうあるべきかを説かれた言葉の中に見ることが出来ます。瞋(こゝろ)とは、怒(いかり)・憎(にくしみ)・恨(うらみ)・妬(おとしみ)・嫉(そしめ)の心のことで、どれほど善い行いを積んできた人でも、たった一回の瞋(こゝろ)が、すべてを消し去ってしまうほどの心の様子をいいます。つまり瞋煩惱とは、自分の思い通りにならないことがあると、自己中心的な考え方に執着するあまり、強い瞋りとなつて表れてくる、人の心を乱す原因と捉えることが出来ます。また、瞋りの心をコントロールすることが難しいのは、瞋りの心の持ち主が「自分が悪い」と思わないことに起因するからです。法然上人はそのような私たちに対して「瞋煩惱も、敬上慈下の心を破らずして道理を心得んほどなり。」(瞋りの煩惱は誰もが持つてゐるけれど、まずは目上の人を敬い、目下の人をいたわる心を失わずに、人として正しい行いをするのが大切である。)とお示しくださっています。また、この言葉には、誰からも信頼される自分でありたいと思うこと、そして、それにふさわしい行動をとることがとても大切であるという意味も含まれています。つまり、自分自身を見つめ、自分の至らなさを認め、信頼に値する人になろうと行動することが、互いに尊敬しあえ

る関係をつくることにつながっていくといえます。この心を育てたいと、大島先生は強く願われたのだと思います。

法然上人が詠まれた二十三首の和歌の中に

「池の水 人の心に似たりけり 濁り澄むこと 定めなければ」という自身の心の様子を詠まれた一首があります。法然上人は、厳しく自己を見つめられた末に、「生きてゐる限り、煩惱(執着する心)が無くなることはない。それが私(人間)の心の有り様である。」と、自分自身がそういう存在であることを認めになりました。そして、そのような私たち(凡夫)が救われる道を探し続けられ、ようやく阿弥陀さまの本願念仏の御教えを見つけられたのです。すなわち「執着の心に満ちている私でも、お念仏をお称えすれば阿弥陀さまが救つてくださる。何と有り難いことだろう。」と、自分を振り返ることが出来る人の心に、深く染み渡つてゆくのがお念仏の教えなのです。そして自己内省の実践は、建学の精神「三宝帰依」の実践へとつながっていきます。執着の心を捨て明るくなれば正しい関係が生まれます。正しくなれば親切な心が生まれます。親切になれば互いに尊敬しあえる明るい生活ができます。大島先生のお心でもある自己内省・敬上慈下を常に心がけ、建学の精神を実践しましょう。